放送大学浜松同窓会

第14号
発行：放送大学浜松同窓会
編集：浜松事務局　河合 京子
発行責任者：　越川　一美
発行：令和 5年 12月 1日

風船かずら

seeds of heart

放送大学同窓会連合会　https://rengokai.ouj-dosokai.net/
放送大学浜松同窓会HP　http://hdosokai.web.fc2.com/
浜松同窓会 Facebook　https://www.facebook.com/groups/236468470820086

【目次】

シリコンバレーの哲学者　静岡学習センター所長　石井　潔‥1‥2
御挨拶　浜松同窓会会長　越川 一美 ‥‥‥3
ボケ防止に国家資格にチャレンジ　浜松学燈会会長　伊尾喜 禎則 ‥‥4
福島の今　渡邉 とし江‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥5
南アルプスへの想い再び　石田　吉央‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥6
40,000 ㎞を歩いた　越川　一美 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥7
私の学習歴　倉田　一 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥8
浜松から九州へ　ひとりたび　鈴木 みづほ ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥9
近頃思うこと　寺田 和男 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥10
韓国との生涯学習交流　中山 礼行 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥11
初めての科目履修　仲塚 とし子 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥12
「変体仮名」と叔母からの手紙　小笠原 敏弘‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥13
編集後記　河合 京子‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥14

最近アメリカの書評誌『ニューヨーク・レヴュー・オブ・ブックス』で面白い本の書評を読む機会があった（2023 年 9 月 21 日号）。ジョン・ティンネルという英文学が専門の学者が書いた『パラ・アルトの哲学者：マーク・ワイザー、ゼロックス PARC、IoT の起源』がそれである。パラ・アルトはシリコンバレーの地名で、スタンフォード大学や書名にも入っているゼロックスの「パラ・アルト研究所（PARC）」もここにある。マーク・ワイザーは残念ながら癌のため 1999 年に 40 代後半で亡くなった優秀な技術者で、アップルが最初に採用して現在ではパソコンやスマホに標準装備されているグラフィック・インターフェースソフト Alto（アイコンとマウスによるコンピュータ操作）の開発者であった。我々が MS-DOS のコマンドを覚えるという面倒な手続きから解放されたのは彼のおかげであり、私のように途中で NEC98 シリーズからマックに乗り換えた世代の者はその有難味が身に染みているはずである。

ワイザーは夜になるとパンク・バンドのドラムを叩いているような多彩な人であったようだが、哲学にも相当の素養があって、とりわけハイデガーの哲学に魅かれるものがあったとのことで、書名の「パラ・アルトの哲学者」はここから来ている。ハイデガーは思考の「主体」としての自己が物理的な「客体」としての世界と明確に区別されるべきだというデカルト的世界観（一般的に「心身二元論」と呼ばれ、「我思う故に我あり」という有名な言葉は自己の本質が「思考」であることを示している）を批判し、自己は「世界内存在」として「環境」としての世界の内部に深く根差し、そこに「住まう」存在であることを強調した哲学者として知られている。例えば日本人は伝統的な社会的慣習や文化的伝統、日本語という言語などを自己を構成する不可欠の一部として内部化しており、そこに「住まう」存在として以外の自己をイメージすることは困難である。我々はそのような意味で世界に向かって「投げられた」受動的な存在なのであり、与えられた社会的文化的背景から切り離されたデカルト的な抽象的「自己」など成立しえないというのがハイデガーの考え方なのである。

ワイザーはこのようなハイデガーの哲学からインスピレーションを得て、「主体」としての自己と「客体」としての世界の境界を取り払うために、すべてがコンピュータネットワークによって相互につながれているような世界を構築することを夢みていた。それを彼は「偏在するコンピュータ（ubiquitous computing: ubicomp）」と呼び、それぞれの人が装着した ID バッジに記録された各人が最も心地よいと感じる気温のデータが部屋ごとのエアコンを自動的に調整するような仕組みの開発などにあたった。当時はまだ IoT(Internet of Things)という用語は存在していなかったが、現在は冷蔵庫やエアコン、スマートスピーカーなどの家電をネットワークにつなぐ IoT はかなり一般化しつつあり、彼はハイデガー哲学に導かれて、20 年以上前にこのような状況を現実化しようとした先駆者なのだというのが、この本の主要な主張である。

しかし、この本では同時にこうしたワイザー的な発想に対する批判的意見も紹介されていて興味深い。彼とPARCでの同僚であった女性文化人類学者ルーシー・サッチマンは、このようなワイザーの目指した方向性は「常に親しくある世界(a world which is always familiar)」への欲望の表れであり、例えばアメリカ人の旅行者が日本を訪れた場合、日本語の道路標識がすべて英語で読めるようになるような状態を理想化することになるが、このような安易に誰とでも即座にわかりあえるといった錯覚をもたらしかねないつながりは、世界の見方を変えるような異質な文化や社会との出会いの体験を犠牲にすることによって成り立っていると指摘している。確かに言語学者のボアズ・ケイサーの研究によれば、母語ではない言葉を使用してコミュニケーションを取る場合、我々は生(なま)の感情を押さえてより客観的な視点から物を見たり、考えたりする傾向があり(これを彼は「外国語効果」と呼んでいる)、それによって自らの属する文化的社会的な背景に基づく偏見から解放されることができる。すべてが「親しみ深い」母語の世界に還元されることは我々の視野を狭くする可能性もあるのである。私も中国語、マレー語、英語の三カ国語を自由に操るシンガポールのリー・シェンロン首相が、父のリー・クアンユー元首相の追悼演説で、同じ内容であるのに、中国語の時だけ涙を流した光景をよく覚えている。感情のこもった「親しみ深い」世界だけがもたらす豊かな瞬間が、同時にその世界を越えて別の世界への理解を深める機会を制限することになるかもしれない複雑な世界に我々は生きていることを、この書評を読んで改めて実感した次第である。

2023年9月24日 学位授与式

同窓会会員の皆様におかれましては、日頃から同窓会の行事に積極的に参加いただき有難うございます。2023 年も残り少なくなってきましたが、機関誌の「風船かずら」14 号を発刊することができることになりました。投稿して下さいました石井センター長を初めとする皆様方、編集に尽力された河合京子さんには感謝を申し上げます。

「風船かずら」12 号から 13 号の間は 2 年と間を空けてしまいました。これは、私達が初めて経験したパンデミックにより多くの資源を使わざるを得なかったことにあるとは申すものの、新米であった会長（私）の責任でもあったと反省しています。昨年より再開していますが、実際にはやれやれと一息つけたなと思っていると、もう投稿依頼の時期が来たとなっています。会員の皆様方も、こんなこと･あんなこともあった、大学についての思いなど、気が付かれました時にメモって、次号のためネタを集め投稿されますようお願いします。

2023 年度の残りの事業は、第 8 回パソコン教室が 2024 年 1 月 7 日（日）クリエート浜松 21 会議室 12:30 ～ 16:30 に行われます。パソコンやそのアプリはどんどん進化しています。例えば、10 年前にあった、「パワーポイント」の解説本が、今でも新たな解説本として幾つか発刊されています。中身の進化に対するものだと思っていますので、やってみようかと思った時がチャンスです。

是非、ご参加ください。

2024 年度は、秋の小旅行に替わって日帰りの研修旅行が再開されます。そこで、コロナの期間から始めた「歴史旅（災害に対する先人の知恵を訪ねる）」を終えてしまうのは残念で、春に小旅行を企画しようと考えています。なんと言っても、「継続は力也」です。

来年度の事業計画も決定次第連絡致しますので、皆様方の参加をお待ちしております。

集合写真田代家

出発式（二俣本町駅前）

信康廟内

放送大学の2回目の卒業が視野入りはじめたころ、70歳が近くなったこともありボケ防止の為に何か始めようと考えました。目標がはっきりして少し重めのことはないものかと色々考えていたところ、高校を卒業して20年たったころの同窓会の折に第1級陸上無線技術士を取得した同級生の話を思い出し私もチャレンジすることにしました。国家試験の内容の一部は半世紀前の高校時代に少し学習していたこともあり比較的学習はスムーズに進み1年で合格できました。名古屋の試験場では高専生や若い方に交じって受験して、資格試験に取得には年齢よりやる気の問題だなと感じました。次に自分の学んだことがない分野の電気主任技術者資格にチャレンジすることにしました。自分の専門外の資格なので下位の資格の第3種電気主任技術者の国家試験の取得を目指すことにしました。インターネットの情報では3000時間程度の学習が必要とありましたので長く楽しめそうと思い学習をはじめました。どのような分野のことをどのくらい学習が必要なのか、知識の理解の深さはどのくらいなのか、どんな参考書がいいのかなど、勉強を始める前の準備が以外にも長い時間が必要でした。勉強を進めて行くと非常に幅広い分野の知識が必要なこと、また深い知識が必要なことが分かりお初めて1年目は悪戦苦闘の連続でした。元々3年間で合格することを目標にして学習計画を立て始めましたがそれでも学習を続けていると2年で合格ができました。

新入生へのガイダンス

知らない分野の国家試験を受けて感じたことは、自分の能力は確実に衰えていること、インターネット上に資格取得の為の情報豊富に存在し以前とは比較にならないくらい環境が整っていることなど条件の良し悪しがありましたが、退職後放送大学で学び続けていたおかげで学びの習慣が身についていること、新しい分野を学習するにあたっての取り組み方が身についていたことにより長期にわたり資格試験の勉強を続けても挫折することなく乗り切ることができました。新規の分野でも学習の習慣と学び方が身についていると年を取っても意外とやれると自信がつきました。

できれば、放送大学を卒業された若いみなさんもせっかく身に着けた学習する習慣を仕事に生かせる資格取得に生かしてみてはいかがですか。放送大学在学中に身に着けた一番の宝は卒業証書ではなく学習の習慣ではないでしょうか。私もこの習慣を活かしてより上級の資格取得を目指し健康で楽しい人生を過ごそうと思います。

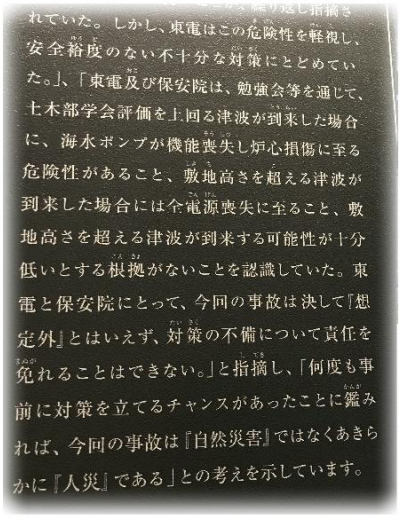
10月の末に、東日本大震災・原子力災害伝承館に行ってきた。この施設は、2020年に開館した。

福島浜通りの復興はどうなっているのか。福島の被災地を少しだけ回ったが、黄色いセイタカアワダチソウが群れていて、荒れている。しかし、道路は整備されていた。除染されているところも、されていないところも回ったが、いずれも人影は少ない。ところどころ、復興の立て看板を見かけるが、すすきの穂に隠れそうだ。

岩手や宮城に比べて、福島は原発の被害が大きい。いうまでもなく、福島第一原子力発電所が爆発し、放射能漏れを起こしたからだ。伝承館の「かたりべさん」は、放射能という見えない恐怖について語った。ある学校の写真では、校舎もあるし、まだ12年だから、人工芝はきれいだ。しかし、そこで野球する球児は、いない。見かけは同じでも内部は、まったく違うものになってしまうのだと。

原発事故について、伝承館の展示パネルでは〝人災〟という言葉が使われていた。この人災とは誰を指すのか。一般的には、事故を起こした東京電力の旧経営陣だろう。しかし、私の印象では、その当時の日本政府の対応に疑問が大きい。

原子炉の設計はアメリカのものを基本としているし、スリーマイル島の原発事故の経験もしている米国だ。その米国から支援の申し出があったのに、日本の機密保持という観点から断ってしまっている。もっとも、こういうことは後から知ったのだが、あの混乱の現場の様子をテレビで見ていて、誰でもいいから爆発を止めてほしいと思ったのは、私だけではないはずだ。


れていた。しかし、東電はこの危険性を軽視し、安全裕度のない不十分な対策にとどめていた。」、「東電及び保安院は、勉強会等を通じて、土木部学会評価を上回る津波が到来した場合に、海水ポンプが機能喪失し炉心損傷に至る危険性があること、敷地高さを超える津波が到来した場合には全電源喪失に至ること、敷地高さを超える津波が到来する可能性が十分低いとする根拠がないことを認識していた。東電と保安院にとって、今回の事故は決して『想定外』とはいえず、対策の不備について責任を免れることはできない。」と指摘し、「何度も事前に対策を立てるチャンスがあったことに鑑みれば、今回の事故は『自然災害』ではなくあきらかに『人災』である」との考えを示しています。

その対応の鈍さには、まだ大丈夫だ、と思いたい人間心理や、いざというときには、何かに助けてもらえるはずだという日本人に共通する甘えがあったように思う。また、事故の起こる前までは、原子力発電の安全神話も喧伝されていて、私も、その簡単な発電の仕組みを知った時にはワクワクとしたものである。自分には分からないことも、政府が言うから、学者が言うから安全なのだと鵜呑みにしていた。そういう私自身をも含めての〝人災〟なのではないかと思わされて福島を後にした。

今年 4 月、春の陽気に誘われて久しぶりに大井川上流を訪ねた。自宅掛川から金谷、千頭、井川と車を運び、畑薙第一ダムへと向かった。途中見える上河内岳に残雪が残っていた。沼平ゲートからは 4 月のまだ冷たい風を受けながら畑薙大吊橋へと歩いた。周りの景色、佇まいは若い頃と変わっていなかった。その日は畑薙第一ダム手前の南アルプス赤石温泉白樺荘に宿を取り、温泉に浸かり、美味しいお酒と食事をとりながら若かりし頃の山行を思い出していた。「よし！今度は紅葉期に、いつかはあの南アルプスの稜線に再び！」こんな想いをしていた。

猛暑続きの今夏、いよいよこれからが活動期の 10 月に入り、ウオーキング三昧の筈が何故か現在病院のベットの上。まさしくウオーキング途中で不慮の事故に遭遇、両足首、手首の骨折で全治 3 ヶ月。入院から手術完了までの 3 週間はベット上のみの生活、かなり精神的に落ち込んだ。そんななか車椅子移動が可能になり、病棟 5 階休憩室から今年何度目かの冠雪した富士山が見え、西に目を移すと重なり合う山並みのいちばん奥に南アルプスがチョコっと見えた。確認したところ、聖岳、上河内岳、光岳であった。今年 4 月に尋ねた畑薙第一ダム、茶臼岳への入り口である畑薙大吊橋を思い出し、今頃は紅葉が見頃であることを想像した。併せて、若かりし頃の南アルプス山行のいくつかの思い出が蘇った。

1. 広河原からの北岳、間ノ岳、農鳥岳そして奈良田へ下る白根三山縦走登山: 北岳の威容と三山の雄大さに魅了される。
2. 二軒小屋からの塩見岳ピークハント正月登山、月明かりを頼りの下山、途中蝙蝠岳稜線下森林帯でのビバーグ: 冬山の厳しさを知る。
3. 千枚岳、荒川岳、赤石岳、聖岳、上河内岳、茶臼岳夏山縦走登山: 長丁場を歩き通した満足感。
4. 小学生の息子を連れての北沢峠からの甲斐駒ヶ岳、千丈岳登山: 息子の頑張りと途中出会った雷鳥、黒百合の群生地の記憶。

等々、現在自由に身体を動かせないが為に、尚更南アルプスへの想いが再び沸き上がってきている。

今回の怪我を克服したら、もう一度あの南アルプスの稜線を歩いてみようと。

2008 年頃、「自分の健康寿命は 75 歳程度だろうと」思い、「適当な時期に仕事から手を引き、好きなことをしないと、仕事だけの人生であったとなってしまう」と考えるに至った。62 歳の誕生日を幕引きの目標にすることにして、準備を開始。仕事の調整・全従業員(役員)の行(生)き方の合意形成、会社の整理が終わったのが 62 歳半年の 2010 年 11 月 30 日だった。尤も、税務関係で、法的に時効成立には解散後 7 年が必要ではあった。会社は設立することより解散することの方がはるかに面倒だ。仕事から離れるに際して、心に決めたことは、① 収入(年金)は全てカミさんに渡し、結婚以来、初めての小遣制とする。② その小遣いで文系の大学へ進学する。③ 75 歳までに 40,000 km(地球一周分)を歩く。の 3 つだった。

① 気恥ずかしかったが、すぐ慣れた。

② 家から歩いて 25 分程度の処に愛知大学があり、2011 年 4 月より、英語と経済学の聴講生となった。2 学期が終了した時点で、振り返ってみたところ、試験が無く単位を取得できるわけでもないので自分の進捗状況が分からない。これは無駄だと気付き、通信制の大学を探し、放送大学を見つけた。

③ そもそも、井上ひさしの「4000 万歩の男」を思い出したことにある。伊能忠敬は1日 40 kmを歩き且つ、歩測をしたとある。自分の場合は、パーキンソンの発症(多分、遺伝的にファクター有)を遅らせる効果の目論みもあり、地球一周分を歩こうと思い立った。2010 年 12 月 1 日より歩き始めた。

その時点で計測した歩幅は 73 cmであったので、計算には 0.7m(70 cm)を使うことにした。現在でも 71 cm あるので、妥当だったと思っている。2010 年 12 月の 1 ヶ月で 40 万歩を超えたので、280 km x 12 = 3,360 km/y はゆけるのではと思い、これなら、40,000 kmは 12 年で達成できるとほくそ笑んだ。実際にこの 1 年(11 年 11 月末)の歩数の合計は 500 万歩を超えた。

昔、やったクレペリン検査の結果(開始時期と終了時期に出来高が上昇する)の様に、開始から 4 年と 19～22 年の 4 年の 8 年間は 1 年あたり 450 万歩を下回ることはなかったが、15～18 年には中だるみがあり、2023 年 8 月 26 日にようやく、計 57,143,000 歩となり、40,000 km達成となった。歩き始めの 1 年目の皮算用より遅れること 8 ヶ月 26 日、75 歳の誕生日より 3 ヶ月 13 日余分にかかった。この間、履きつぶした靴は 30 足。1 足あたり 1,350 kmは歩けたことになる。初めの頃の歩速は、5.4 km/h を下ることはなかったが、最近では 5.2 km/h 程度に落ちている。達成後も歩き始めた頃と同様、雨が降らない限り歩いているが、雨が降ると、とても嬉しい。

2015 年卒

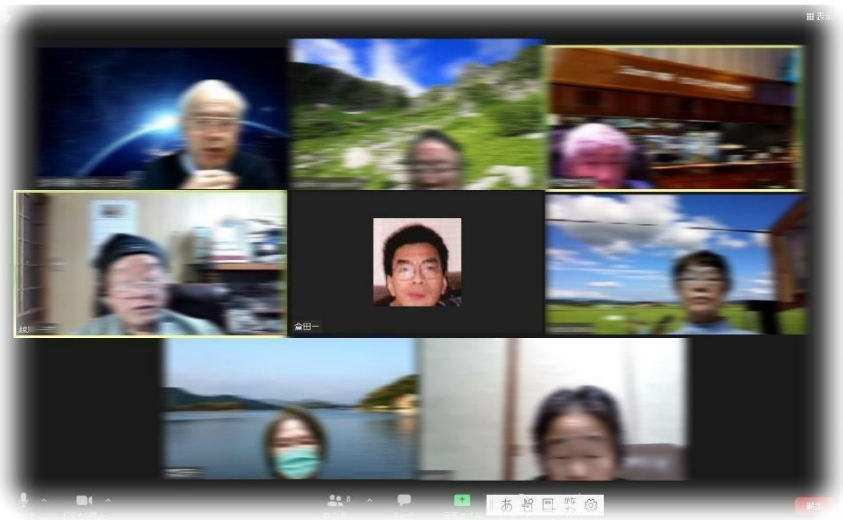
私は，脳性麻痺の為に今で言うと特殊支援学校（肢体不自由児)に小学校一年から高校 3 年まで通いました。

当時は，浜松市北区根洗町において校名を「静岡県立西部養護学校西部分校」として 1964 年(昭和 39 年)4 月に設置されました。その後、校名を「静岡県立中央養護学校」に変更して独立したのが 1974 年(昭和 49 年)4 月 1 日です。

小学部、 中学部は共に「静岡県立西部養護学校」で、高校は「静岡県立中央養護学校」に通いました。

放送大学で,特殊支援教師の養成の授業(テレビ)を見て感想を書きます。浜松は，同じ土地に学校と療護園(専門病院)があり，　渡り廊下で行き帰りを致しました。生徒は，毎日家から通う人と入院する人もありました。私は親(保護者)の考えで半分は療護園に入院して月に 1 回家に帰りました。

療護園では当時は足の又とか膝や足首の所に手術をしている子供が多かったです。ここでは学校生活について書きます。



当時通った養護学校ですがベット学習(療護園)がありました。それは手術をすると約３週間学校にいけないため学校の教員がベットの所にきての学習です。内容は主科目「国語」と「算数」です。時間帯は主に午前中です。午後は　同じ部屋に低学年がいますからできません。

手術から 1 ヵ月過ぎると毎日学校の一時間目に行う訓練は約3ヵ月間続きました。小学生では5年生くらいはまだ分かりますが，6 年生頃から追いつくにはたいへんでした。教員は授業のない時間は現在施設などで行っている介護の仕事もしていました。また、授業の時間中にも訓練の時間もありました。授業の速度は時間を掛けて特に児童が教科書を読む時、黒板の字をノートに書き写しには時間がかかります。

中学とか高校の時は先生の一時間の授業の黒板の書く予定分をプリントして授業中にマークシートしていました。

学習内容は，英語は「単語」国語は「読み書き」数学は計算です。確実に生活に必要なことが中心です。

7 月に富山県へ、生誕 150 年の日本画家・河合玉堂の展覧会に足を延ばした。その会場で、今年は数ヵ所の美術館で玉堂の展覧会が開催され、且つ展示作品が重ならないとの表示があった。そこで、目標の第一として二階堂美術館（大分県速見郡日出町）見学、第二はキティちゃん新幹線乗車を計画しました。

1 日目：　午前中は後期のセミナーに参加したので、午後から 浜松 JR 豊橋・名古屋鉄道にて中部国際空港へ。18 時 10 分発の LCC（Jetster 運よく往復共にバーゲンを利用）に搭乗し福岡空港に降り立った。

宿は博多駅前のカプセルホテル。ホテルの方針で館内には従業員の姿はなし。

受付は事前に送られてきた QR コードを使うことになっていたが、不慣れな私にはアクセスできず、困っていたところ通りがかった方に話すと快く使い方を教えて頂け、何とか雨露を凌ぐことができました。

2 日目：　7 時 31 分博多駅発、特急「にちりん」シーガイア宮崎空港駅行に乗車し、約 3 時間で杵築（きつき）経由にて日出（ひじ）駅に、更に徒歩 5 分で第一の目的地「二階堂美術館」に到着となった。学割料金￥500 で入館、静かで貸し切り状態の見学だった。

見学後に杵築に戻るつもりが、館内で見つけたパンフレットに惹かれ、普通電車に乗り込み 40 分かけて大分駅まで足を延ばした。大分市はグランシップを設計した磯崎新、日本画家の高山達夫・福田平八郎ら各氏の出身地でもある。大分きゃんバス 1 日乗車券（￥200）を使い、大分美術館に向かい、磯崎新氏の展示を見学した。

博多までの帰路は、青い（白もあり）ソニックで約 2 時間。ソニックは大分駅が始発なので自由席でも全く大丈夫です。

23/9/24 学位授与式

3 日目：　7 時 04 分博多発こだま（キティちゃん、博多・新大阪、1 日 1 往復）にて新下関駅まで約 30 分乗車し、JR 乗り継ぎで下関着。下関からバスで関門トンネル人道入り口、徒歩で対岸の門司（国道 2 号の看板有）に至った。門司側ではバスの本数が少なく待ったが、何とか JR 門司港駅まで進み、海峡横断の証明書を駅近くの施設で発行してもらった。レトロな駅舎の門司港駅から小倉駅に向かい、小倉駅からはあえて九州新幹線車両を選択して博多駅まで戻った。この後、初日の逆コースで浜松まで無事に帰ることができました。

余談です。乗り物好き・麺類好きの私は牛蒡の天ぷらを載せた饂飩を 2 回　!!

飽きません。まだ食べたいので面接授業で再訪を企てている日々です。過去の宮崎での面接授業も饂飩を食べていました。宮崎は、神戸三宮からフェリーを往復利用しましたが、其々の港に連絡バスがあり、思ったより楽でした。

最近のニュースを見ていると、驚くようなものが多い様に思う。情報技術の発達で、従来得られなかったものが報道されるようになったためかも知れませんが。ロシアとウクライナの戦争、イスラエルとパレスチナの紛争、少し前には IS、その他アフガニスタン、ミャンマー、アフリカ等々各地の紛争、殺しあい。何故そうなるのか。何故そこまでやるのか。民間人、子供を問わず相手の生命を脅かし、そしてその影響から、それから政治的問題、貧困の問題等々から難民・避難民が驚くほど増加し 1 億 1 千人を超えたと報道されています。一方政治のあり方「大災害も含め大惨事は、政府にとって民衆を思いのままに支配する政策を実行に移す絶好チャンスである」と言う話もあります。どうしてこんなことが起きているのでしょうか。人はもっと進化・進歩して賢くなっていると思っていましたが。

2023年度2学期で、進化心理学の科目を学んでいます。進化心理学について「学びすぎないように」「自分で考える」という前書きがありました。また、知的な面白さがある反面、進化論的説明に現代の倫理観とかけ離れているものがあることに気づくはずともあります。進化論は利他行動を説明できるかの章もあります。生物学的に言えば、進化とは自然淘汰による進化である。思うに、結局生物として様々な偶然を経て発生したものがさまざまな困難に直面し、いかに生き延び、種を守っていくかの行動、体を変化させて、生き延びていくことに成功したものを進化と呼んでいる。人も他の生物を捕食しながら進化してきた。それが生き残るため生物が生来身に着けている本能なのでしょう。それでも、人は圧倒的に賢く進化してきたのだから、他を思いやる、倫理観のこころの進化がもっとあってほしいと願いたいものです。もちろん、弱者側に寄り添ってとても心温まる活動をしている人たちも大勢います。

少し前にパレスチナ問題という科目を学びました。問題がなぜ発生し未だに解決せずに今日に至っているかかなりわかった気がしました。国際理解のためにという科目も学びました。ユダヤ教・キリスト教・イスラムの起こりとその考え、それから領土問題、特に日本の周りの領土問題について学びました。かなり前の話ですが、NHKの鈴木健二アナウンサーが、クイズゼミナールという番組の決まり文句で「知るは楽しみなり」と言っていました。まさにそうであると思います。私も古希をすぎ、最近の技術的な難しい内容を学ぶ事はむずかしくなってきましたが、今後も学び続け、今何が起こっているか、なぜ起こっているかを少しでも理解していきたいと思います。それが人に役立つ行動につながることを願って。

2023 年は、日本が入国制限解除。新型ウイルス感染症による水際対策は 2023 年 4 月 29 日以降、ワクチン接種証明書も陰性証明書も入国時に不要となった。ようやく日本もインバウンドの海外旅行客が増え始めていた。大邱韓医大学でも、これを受けて 7 月に訪日(3 泊 4 日)が決まり、教授、学生、慶尚北道清道郡の職員･議員 30 名余が掛川市に訪問することになった。今回で 5 回目となった。清道郡は郡守及び議長が来日予定であったが、郡守は台風 6 号による災害対応と議長は渡航寸前にコロナ罹患となり急遽欠席となったが、それ以外の皆さんは元気よく来日された。2019 年 7 月にキム両教授および学生たちを迎えて以来、ちょうど 4 年ぶりとなった。

7 月 19 日は訪日した晩餐会で早速立ち上げた、「大邱韓医大学交流促進市民の会」代表としてご挨拶させていただいた。掛川市側は私を含めて 5 名、韓国側はキム副総長を含めて 6 名、総勢 11 名であった。今回は慶尚北道清道郡関係者 4 名が初めて掛川市を公式訪問した。これは大邱韓医大学との生涯学習を通しての地域政策連携の一つであろう。

こうして生涯学習の輪が広がることは両国に新しい交流の希望がつながることで大いに結構なことである。この日は改めて再開の喜びを伝えることと、新たな出会いと明日からのフィールドワークに、話も弾んだ。翌日 20 日は掛川市長表敬訪問や掛川市南部の視察等を楽しんだようだ。

さて、前回訪日から 4 年の歳月が流れたにもかかわらず、こうして交流ができる事は素晴らしいことだ。2021 年 4 月からは、行政トップも交代していたが、私達や大学の思いは変わっていないと信じたい。

21 日は図書館で筆者の生涯学習による講義もできたし、学生さんと一緒に市内を案内できた。夜には掛川城下で 40 名余の日韓交流会も大いに盛り上がり一層、親密な交流ができたと思っている。

早いもので 22 日は、帰国の日であった。掛川グランドホテルで早朝待機して、中部国際空港へ出発するバスを見送った。4 日間の短くも充実した日々は終了した。来年も再来年も、交流が続きますようにと思わずにはいられなかった。

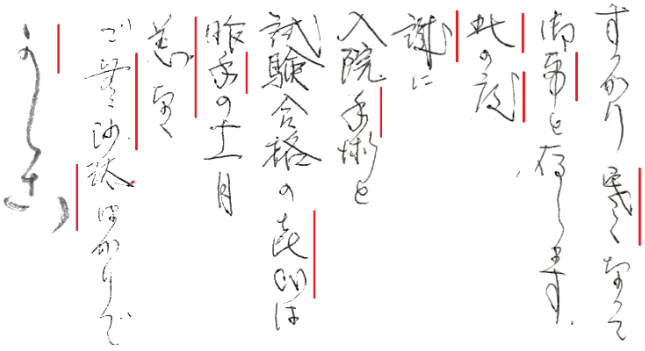
私が放送大学に入学して、始めの一学期に受講した科目の中に福井憲彦教授(後に他大学長)の「歴史学の現在'01」があった。歴史の観点からみると、狩猟生活から農耕という技術を取り入れた時、人類は文化の発展を手に出来るようになった。イラク北東部にあるザクロス山脈のふもとで、野生のムギの栽培が始まり、メソポタミアの三日月地帯へと普及し、さらにステップ地帯やがてはインダス流域まで、西は地中海や黒海沿岸、そしてヨーロッパへと伝播していった。教授が現地を訪れて地質や気候から考える考古学的な授業は新鮮で、心がワクワクしたことを今でも鮮明に覚えている。教材のビデオによって、見知らぬ国の社会史から考える歴史や文化など、いろいろな角度から知識が吸収できる事は、当初の私にとっては、かけがえのない喜びだった。

他に体育実技として、週 1 回行っている、マスターズスイミングクラブを申請した。何十回かの受講の後に単位が認定され、合格となった。マスターズ水泳は現在も続いていて、大会に出場することによってたくさんのメダルや賞状をいただくことができた。教材を通して得られる知識ばかりではなく、スポーツの面では、技術を習得し、仲間と切磋琢磨することによって、感性も磨かれ私も成長できたと思える。また、自分の体調を知り健康に注意し、栄養管理をこころがけるようになり、体力維持にもとても役立っている。

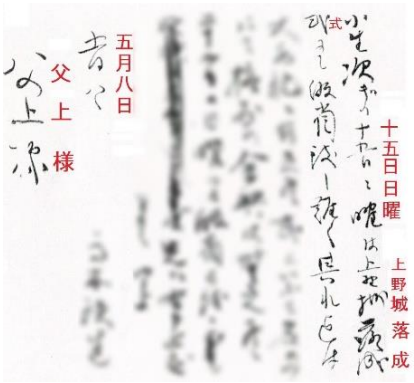
歴史で学んだ、ヨーロッパや中東、アジアなど知らない国の事をこの目で見て、触れて確かめてみたいという興味は未だに尽きない。国によって、さまざまな違いがあるのは、もちろんだろうが、たとえばマスターズ世界水泳大会に出場し、他の国の見知らぬ選手達といっしょに泳ぐという展開があるとしたら、どのような積極的な可能性があるのか、言葉の壁やシステムへの取りかかりの疎さにためらいも多く、まだまだ覚えなくてはいけないことがらが、浮上してくることになるのは必然だった。

第 13 回もみじ CUP2023

2023年2月23日(木)に NHKBS103 で「新日本風土記スペシャル松本清張鉄道の旅」(以後氏)が放映された。既にこの番組は2020年の5月に放映されていたようだ。番組を見ていたら創作活動の際にお世話になった方へのお礼の手紙が写し出されていた。内容は「八年前のわが手紙　なつかしむ眼ににじむ　豊前の秋」と書き出しに書かれている。そして、手紙の漢字をよく見ると今は使われていない変体仮名が混じっていることに気が付いたのである。氏は明治42年12月に北九州で生まれたと記されていたがこの時代でも変体仮名が使われていたのである。



そこで引き出しにしまっておいた父方の叔母からの手紙を見直してみた。今から27年前の 1996 年 11 月(平成9年)に遠方で暮らす叔母に遠州地方の特産・次郎柿を送ったことによるお礼と近況であった。叔母の生年月日ははっきりしないが確か叔父が大正5年に生まれていると聞いていたので恐らく同じ大正の前半で、氏とは八歳ぐらい差はあるだろうが同時代に教育を受けていたと考えてもよいだろう。当時は少し読みにくく感じていたが前後の文脈で凡その内容は理解できた。「～すっかり寒くなって～」、「御事と存じます。」、「此の度」、「誠に」、「手術」、「𡚁比」、「昨年の十一月」、「恙なく」、「ご無沙汰゛」であるが前年に届いた手紙も読むと最後には「可し古」となっていることも確認できた。ここにきて読みにくかった原因にやっとたどり着くことができたのである。



さて、もう一通の手紙を書庫から取り出してみた。これは、明治43年(1910 年)3月16日～同年6月13日まで開かれた博覧会に生徒を引率した様子を父親宛に送ったものである。開催場所は名古屋市鶴舞公園。入場料を大人十銭、団体三銭払い、「特許館」、「機械館」、「台湾館」などを見物し、当時の時代を表す、「旅順海戦館」は別途三十銭必要とあるが「見る価値は有之候」とも書かれている。そして最後の部分には、この年の5月 15 日(日)に伊賀上野城で落慶式典があるので帰省できないことを知らせている。

明治 43 年 5 月 15 日(日)に上野城で落慶式を行ったとすることをネット検索しても容易には出てはこなかった。明治、大正、昭和とその時代を書き表した手紙を取り上げてみたが有る時を境に使われなくなってしまった文字形式が存在していた。それはまさしく祖父や祖母が暮らしていた時代でもある。そして、その手紙の中には様々な情報(資料)がちりばめられていることを知ることになるのである。

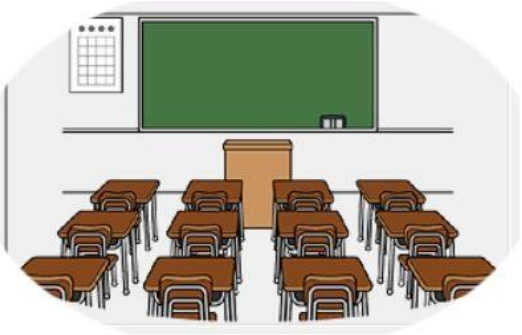
今年も風船かずらに、力強い体験談が続々と集まりました。

放送大学を卒業された方たちですから学びに対して粘り強いのは当然ですが、研究を楽しみ、また趣味にも深い探求心を発揮されて、人生を謳歌しているようです。

同窓会会長の越川さんは、学びと親睦を兼ねた計画をいつも練っています。特に「歴史の旅」を今後も続けてくださるようですから楽しみにしています。―「継続は力也」

学燈会会長の伊尾喜さんは「パソコン教室」にその経験を惜しみなく提供しています。ご自身もチャレンジ精神で言います。――「宝は卒業証書ではなく学習の習慣」

確かにその通りで、大いに励まされます。



さて今年の私の成果を披露します。

O さんに、我が家に眠っていた巻紙に毛筆の手紙を解読していただきました。それは、父が戦地へ送りそして戦死された方の、お父様からのお礼状でした。軍隊時代の履歴を調べることができると聞き、問い合わせたところ諸々の真実が明らかになりました。

太平洋戦争時代に軍人だった父は、過去を封印したかのように戦後を淡々と生き抜きました。戦後の民主主義教育をなんの疑いもなく受けた私は、父の戦争体験に思いを馳せることがありませんでしたが、手紙の内容がわかり、軍歴と戸籍などを突き合わせて考察したところ、父の気持ちを推し量ることが重要だと思いました。

私の知る父は、穏やかで学問好き。しかし、明治生まれの父は四十歳までは戦争当事者でいたのです。戦争に突き進む時代の中でどんな思いでいたのか、一転して戦後はどう折り合いをつけて生きるべきと考えたか……安易な推察はできません。胸が痛みます。

「戦争が十年以上もないなんて、今までなかった」と晩年に口にしたのを覚えています。

そして、『父の履歴書』というエッセイを書きあげました。今までほとんど知らなかった父の思いを掘り起こすことができたのは、O さんのアドバイスがあってこそ、です。

日々、困ったり悩んだり、壁にぶち当たったたりですが、そんな時は友が力になってくれます。友が背中を押してくれます。私の周りには健康や生活から芸術まで、それぞれの専門家や達人がいて私の知恵袋になっています。

幼なじみから放送大学で出会った友たちまで皆、私の宝物です。